論文要旨

論文題目　**中国の大学教育のジェンダー分析**－なぜ工学系分野に女性が少ないのか－
氏　　名　劉　雯

研究課題

中国の伝統的な大学教育研究において、ジェンダーの視点は常に無視されるか、あるいは周辺的に扱われてきた。1949 年まで、中国女性は男性と同等に大学教育を受ける権利もなければ、大学において発言権もなかったことについて取り上げられることさえなかった。この論文によって大学教育のジェンダー視点の欠如に関する研究に切り込んで分析できたのは、本学大学院において学んだフェミニズム理論・女性学・ジェンダー研究の重要な影響があったからである。ジェンダーの視点から見たとき、ジェンダーが実際には、いかに大学教育のあらゆる面に作用し、大学教育のあり方を形成してきたかが可視化されることになったのである。女性が平等な大学教育への入学の権利を獲得しただけにとどまらず、一貫して男性が主導的地位についてきた学問分野で形成された知識そのものを改めて考察することになったからである。しかしながら中国の大学における専攻分野では、一般的に女性は文系、男性は理工系という偏りが存在している。中華教育改進社が実施した 1922 年から 1923 年の中国全国調査によれば、当時の女子大学生数は、師範大学における女子学生が占める比率が最も高いが、9.18%に過ぎない。農学ではゼロであり、工学、経営、法学などでも極めて少なく、2%以下である。その原因として女性が男性よりも理数系の能力が低いと考えられることがあるであろう。しかし、実際に工学系への進路を選択する女性の割合が少ないのは、学力や才能の違いというよりは、むしろ社会文化構造を背景とした意識のジェンダー観を反映しているのではないか、という仮説のもとに調査研究を企画し、中国の湖北省武漢市において理工系の大学で調査を行った。

中国の大学教育において、女子学生が専攻を選択する際には、「自由な選択」という名のもとでも、男性向き、女性向きの専攻へと導く社会的風潮や、進路指導の場面が存在する事実に遭遇するのである。また、就職の場面においても、女性は依然として不利な地位におかれることが度々ある。さらに、1980 年以来の中国改革開放以降の専攻選択動向を見ても、工学系分野を選択する女子学生の比率は依然として低いことがわかる。工学系における女子学生の割合は、2005 年の 4 年制大学学部の入学者において 14.50%、2006 年 22.69%、2010 年 21.10%であり、入学者全体の女子の割合 50.86%と比較して極めて低い。このように、専攻分野の選択や就職にもジェンダーの問題が影響を及ぼしているのではないかと考えられるのである。

しかしながら、中国学術界や大学教育界は、これまでこのような問題を重要な研究対象と見なしてはこなかった。中には、大学教育の男女格差は自然の摂理に合った、合理的なものであると主張する研究者もいれば、性差に基づいた自然なことであると解釈する者もいる。

しかし、1980 年代になると、欧米のフェミニスト研究者たちは、これについて疑問を呈するようになった。専攻分野の偏り、理工系における女性割合の少なさは、女性運動における重要な課題となり、運動展開の重要なキーワードとして登場するようになった。

この運動においては、女性と男性の可能性は本質的には全く同じであり、両者は同じ精神と理性を持つと見なしており、女性が差別される主な原因は、男性と同様の教育と思想・批判的訓練を受けていないことにあるとしている。中でも大学教育における不平等を解決する方法は、教育を受ける権利や資源の分配等の面で、男性と女性を平等に扱うことであるという主張をした。

また、1960～70 年代の第二波フェミニズムは、大学教育に衝撃をもたらした。この時期のフェミニストたちの関心は、大学教育における女性の問題やジェンダーバイアスに対する批判に留まらず、歴史や研究史、大学教育における女性の主体の強調へと向けられた。女性自身も、女性に関する研究の対象から女性学の主体へと変化するようになった。

大学教育を改めて考察する中で、フェミニズム研究者たちは、学問において大学教育で扱うテーマが女性の経験や生活体験と無関係であることもジェンダーの問題が生じる重要な要因であることに気づいた。そこで、個々の学問分野を起点に知識体系全体を徐々に整理する中で、大学教育の標榜する「性的に中立的な学問」という立場には疑義を呈する必要性を見出すことになった。大学教育に関する学問や構成にはジェンダーバイアスが存在し、教育界の権威者たちが主張するように、「大学教育は公正で、客観的・中立的立場にある」ではないことが明らかになったのである。

以上のことから、本論文ではジェンダーというキーワードが社会現象や社会的行動を研究する上で、中国の大学教育にどのような影響を与えてきたのかについて考察した。

研究目的

大学教育におけるジェンダーの問題は、中国と欧米には相似性と独自性が存在する。相似性とは主に、女性が大学教育で長期にわたって排除されてきた歴史があること、性差による不平等があるという問題である。一方、独自性とは、中国独自の歴史的・文化的背景と社会制度、学問の形成における伝統によって、人々がこの問題に注目し、理解しようとすることであるが、そうした背景を踏まえた上で、欧米で発達したフェミニズムと歴史的発展をたどってきたのである。

中国の女性解放運動は、歴史的に国や民族の運命と密接に関係してきた。1949 年に新中国が建国されて以降の 30 年間、男女平等という基本的な国策によって国の意図するジェンダー平等の形が示されてきたが、1980 年代に始まった改革開放によって、中国は計画経済から市場経済へと移行し、国の意志によって形作られた男女平等も市場経済の波によって徐々に幻と化し、大学教育におけるジェンダーの問題に対しても学術的関心を集め始めるようになった。その代表例とし挙げられるのは、1995 年に、北京で開催された第 4 回世界女性会議である。その会議において、ジェンダーの問題に対する中国社会の関心は大いに高まり、同時に欧米のフェミニズム思想が急速に中国に紹介されるようになった。これにより、フェミニズムの視点から中国社会のジェンダー問題が分析されるようになったのである。そうした観点から、本論文の研究目的は、中国大学教育の概念や主体、学問の内容と生産のあり方、大学のカリキュラムと教育技術の伝授等におけるジェンダーの存在がどのように関わっているのかを明らかにしていくうえで、特に中国の工学系大学教育におけるジェンダー研究及び新たな思考の筋道や方法を探って行こうとするものである。

論文の構成

第Ⅰ部では、大学教育とジェンダーに関する理論研究において、フェミニズム理論に基づき以下の 4 点を分析し、大学教育におけるジェンダーの現状の一端を明らかにしていく。一つ目は、大学の各分野の学問が男性によって構築された男性についての学問であり、女性という存在に対する視点が欠落し、また周辺化されている現在の教育における構造問題について分析する。二つ目は、制度として各学科に表れるジェンダーの問題を検討し、フェミニズムの立場からそれらを批判し、そしてフェミニズムの観点から学科について再認識することと再構築する必要性について論じていくことにする。三つ目は、フェミニズム認識論の根拠について考察し、伝統的なカリキュラム文化における男性中心の視点を批判し、現在の各分野の学問の枠組みについて考察する。最後に、主に伝統的な教育論及びそのジェンダーに立脚する立場性に対する批判を通して、フェミニズム教育論の基本的理念を明らかにしていく。

近年では、中国の大学教育におけるジェンダー研究は様々な立場から異なる切り口で考察が試みられている。工学系分野の大学教育については、工学系専攻入学後女子学生の学習状況や就職難の問題に関する実証的研究が多く蓄積されている。しかしその一方で、女子学生の工学系専攻への進学における要因に関する研究は非常に少なく、ジェンダーの視点からの言及はわずかしかない。そこで、本論文の第Ⅱ部では、調査を通じて、フェミニズムの視点から工学系大学の女子学生が少ない実態の背景を、大学の構造に焦点をあてて探ることを試みた。大学工学系教育について改めて分析し、未だ一般的に認識されるに至っていないジェンダーバイアスの存在する事実を明らか

にし、その上で中国の工学系大学教育におけるジェンダー研究及び新たな思考の筋道や方法を探っていくものである。

研究方法

１）理論的研究

大学における様々な問題を抽出するとともに、本研究の理論的研究ツールであるフェミニズム認識論と関連づけて分析を行った。本論文の第Ｉ部ではジェンダー的視点を縦軸に基本的な分析を行い、大学教育の歴史を横軸に展開する。まずは歴史という横軸から問題を提起し、女性が大学教育から遠ざけられてきた歴史的変遷という事実から「学問と性別」を問題解決の手がかりとしてたぐり寄せ、女性が排斥・蔑視されてきたことを分析する上での重要な認識的視点とした。次に、大学教育における 4 つの中核である学問、学科、カリキュラム及び教学法を本研究の分析対象として抽出し、それぞれの側面についてジェンダーの視点から考察する。このような分析を通し、中国の大学教育におけるジェンダーバイアスを明らかにし、大学教育におけるジェンダーの問題に対する解決方法を導きだそうとするものである。

２）調査研究

具体的に大学における工学系教育に存在するジェンダー問題を分析するため、2 つの調査を通じて研究を行った。一つは、中国政府の教育科学計画課題の一部調査データをもとに、13 の大学のうち、中国武漢市にある華中科技大学の女性・男性大学生に対し行った調査結果から、女子大学生の大学入学以前の教育環境、家庭環境、大学の工学教育の現状を把握し、工学系教育におけるジェンダー問題を明らかにするものである。また、工学系教員計 16 名（女性 8 名、男性 8 名）に対しインタビュー調査を行った。工学系教員の女性の学生に対する理解に加え、工学系女性教員の現状などについても明らかにするものである。以上二つの調査方法を通して、なぜ、中国の工学系大学において女子学生が少ないのか、という疑問点を中心に、中国の工学系大学教育におけるジェンダー研究を行ったのである。